

アルケイアー記録・情報・歴史・歴史  
第三号 二〇〇九年三月 一一三―一二二頁  
南山大学史料室

聴き取りと歴史研究  
―老輩の経験から―

原不二夫

---

Joy and Sorrow of Oral History : Experience of an Old Historian  
HARA Fujio

*archeia: documents, information and history*  
No.3 March, 2009 pp.113-121  
NAnzan University Archives

# 聴き取りと歴史研究

—老輩の経験から—

原不二夫

## 一 シンガポールでの「集団聴き取り」

昨二〇〇八年十一月、シンガポール国立大学アジア研究所 (Asia Research Institute, ARI) で、同研究所と東南アジア研究所 (Institute of Southeast Asian Studies, ISEAS) とが共催した「北カリマンタン共産党歴史対話会」(North Kalimantan Communist Party History Dialogue Session) に出席する機会があった。一九六二年末のブルネイ反乱直後から一八九〇年の政府との和平協定調印までマレーシアのサラワク (ボルネオ島) で武装闘争を続けていた「北カリマンタン共産党」のかつての最高指導者数名 (中国在住の文銘権 Wen Ming Chyuan 委員長は除く) が、各国の歴史研究者の質問に答える、という企画だった。元共産党指導者からの聴き取りという点で同じような会議が一九九九年二月にオーストラリア国立大学で陳平 (Chin Peng) マラヤ共産党書記長を招いて開かれ、その結果はすでに公刊されている<sup>1)</sup>。二つの会議を主宰したのは、著名な歴史学者アンソニー・リード (Anthony Reid) 教授だった。北カ

リマンタン共産党ゲリラには、一九七四年にサラワク州政府と和平協定を結んで闘争を停止した勢力と、九〇年に闘争を停止した勢力とがあるのだが、この会議に両勢力の最高幹部が出席し親しく懇談していたのには、(反対派 肅清の歴史に彩られた各国共産党の場合、一旦対立すれば終生関係修復困難だという先入観があったから)、感慨ひとしおだった。

北カリマンタン共産党指導者たちとの質疑で最大の焦点になったのは、一九六五年九月一九日にインドネシア領西カリマンタン(サラワクの共産ゲリラは六三年以来この地でインドネシア軍から軍事訓練を受けていた)の最大都市ポンティアナクで開かれ同党の結成を決めた重要会議で、文銘権委員長が「インドネシアで近く軍事政変が起きるとい噂がある」と述べたとされる点だった。インドネシア情報部から伝えられたことだったが、そういう噂はたびたびあったので実際に起きるかどうかわからず、対応策も練らなかつたという。まさにこの十一日後にインドネシアのみならず東南アジア全体の歴史を大転換させる「九・三〇事件」が起き、サラワクのゲリラはインドネシア側からの援助を得られなくなつたばかりか、逆に厳しい鎮圧を受けることになって苦難の道を歩まざるを得なくなるのだが、軍部の決起が実際に事前に探知されていたとすれば、「インドネシア共産党の反乱」とするインドネシア政府の公式見解には再考の余地が生ずる。極めて重要な点だが、これは北カリマンタン共産党指導者からの聴き取りでは究明しようがない。むしろ彼らの側から欧米の研究者に対して、CIAなどのアメリカの公文書を調べて欲しい、との強い要望が出された。ブルネイに関する様々な公式記録を当たって「一九六二年の反乱がイギリス側の策謀、扇動によるものだった」と結論付けた本が、念頭にあつたからである。聴き取りから積み上げる歴史の優れた点と限界とを感じた次第である。

もう一つ興味を惹かれたのは、上述のブルネイ反乱についてである。通説では、左翼政党・人民党(Parta

(Rakyat Brunei) が完全制覇した一九六二年八月の地方議会選挙の結果をイギリスが無視したため、人民党が武装蜂起した、とされている。ところが、最近発表された北カリマンタン共産党の記録には、「選挙前に文委員長らが人民党側の要請でブルネイ国境近くに協議に出向き、武装蜂起する旨を伝えられた。準備が整っておらず時期尚早だと訴えたが、聞き入れられなかった。文は戻った直後の六月二二日に逮捕されたので、党幹部と蜂起への対応を協議することはおろか、蜂起情報の伝達すらできなかった」といった旨が記されている。不思議なことに、文委員長が協議に赴いた時期については、四月、五月、六月半ば、と三つの説が党関係文書に現れていた。会議の合間に個人的に元指導者の一人に聞いてみたところ、「六月半ば説は文委員長自身が書いたもので、帰来後全く時間がなくて情報を伝えられなかったことを強調して批判をかわそうとしたのだろう。実際には時間があつたのだが、蜂起が切羽詰まったものとは考えず放置しようだ」との答えだった。当事者の証言に基づいて歴史を描くのは、なかなか一筋縄ではいかないと、改めて実感した。

当事者説の重要な食い違いが、もう一つあつた。サラワクの最初の本格的な共産組織は「サラワク解放同盟」(Sarawak Liberation League) で、これが北カリマンタン共産党の前身になったのだが、従来同党の公式文書は、「同盟」の結成時期を一九五四年三月二〇日としていた。ところがこの会議で党の歴史について証言した元指導者は、結成は一九五三年七月だと述べた。質問したところ、「五四年三月説は政府情報に基づくものだろう」と一蹴された。この元指導者は、実は一九七四年に「下山」した一人で、上記の党公式文書はその後に書かれたものである。この元指導者自身は直接「同盟」創建に携わったわけではないが、早くから文銘権委員長の最大の側近となつていた。彼はその文委員長から説明を受けていたらしく、会議に提示された文委員長執筆と思われる文書に、「サラワクの進歩的華人青年・張栄任がシンガポールでマラヤ共産党関係者と接触して革命組織結成を決め、一九五三年七月に

同志の文に書簡を送って『工作小組』結成を伝えた」といったことが綴られていた。結成日の違いにどんな政治的意味があるのかは、目下不明である。いずれにしても、当事者証言に基づく歴史構築の難しさが、こんなところにも現れる。<sup>(3)</sup>

## 二 苦い経験

間もなく消え去る老輩として、今までの一番苦い、辛い経験を記しておきたい。

当事者からの聴き取りに依拠して（もちろんそれだけに依拠するわけではないが）歴史研究を行う場合、できるだけ様々な立場の人々から話を聞かなければならない、というのが鉄則である。ところが、実際にそういう人を探し出すのは難しい。取り扱う事柄から時間が経っていけばなおさらである。他方で、そのような当事者がなお数多く存命していれば、その人たちの評価に関わる事柄は、極めて微妙な、そしてなお生々しい意味合いを持つてくる。マレーシアのある町に、戦前日本企業の農園があり、日本人農民が合わせて一〇〇〇人近く働いていた。戦前、戦中に多くの人たちが亡くなり、同地に一九一七年に造成された日本人墓地に葬られた。ほとんどが鉄木（ブリアン *Balian*）と呼ばれる堅固な木材で作られたという。戦後、遺族は慰霊団を組織して何度か同地に赴き、墓参した。ところがある年、墓碑が総て取り払われ、代わりに大きな「合同墓碑」が一基建てられていたという。肉親の墓を失った遺族の人々の悲痛な文を読み、またそうした人々から直接話を聞いて、そうした角度からの文を拙著に載せた。一年ほど後、思いがけない抗議が寄せられた。戦後再び同じ企業から同地に派遣されて仕事をしていた人が、「駐在中、墓地の管理に最大限の努力を払った。慰霊団の面倒も見て、彼らから深く感謝されている。しかし墓地の管

理を続けることができなくなったので、やむなく一つにまとめたのだ。あの本の当該箇所を撤回せよ」と申し込んできたのである。何度も話し合いを持ち、「墓地管理に努めておられたことを知らず、記述に配慮が欠けていた」と謝罪して、一部の文を書き直した。墓碑を取り払った側があつたわけだから、そちらの側の立場にも配慮を巡らし、当事者を探して意見、事情を聞いてから文をまとめるべきだった。ただ、どのような場合であれ、墓碑を撤去する場合遺族の承認を得なければいけないはずなのに、この人はそうしなかったばかりか、撤去するという連絡もしてなかった。今思えば、「連絡したという証拠を示して下さらない限り、書き換えるには及ばない」と強く主張すべきだったのかも知れない。

この人は、さらに引き続き別の拙著についても異議を申し立て、再び長いやり取りがあつた。最終的に、先方が、事実にもとる、解釈が誤っていると見る点を取りまとめ、こちらが逐一答えを書いて、併せて公刊することになり、ようやく決着した。<sup>(4)</sup>一例を挙げれば、この本は、使用文献中の傍点を付した肝心な部分を無視している、と非難された。私はこれに対し、「執筆者が最も重要と考えて傍点を付した箇所と、数十年後、いや数年後でさえ、場合によっては同時期においてさえ、別の人間がこの文書を見て重要とみなす箇所とは、必ずしも一致しないのは当然」だと答えた。争点を総て見渡してみて、私の主張が理にかなっており、多くの方々の理解を得られたと、当時も今も思っている。

聴き取りなどを用いて歴史を研究する際、いかに慎重さ、周到さが求められるかを、身に沁みて体得させる、長く辛い経験だった。若い研究者の皆さんが老輩の轍を踏まれないよう祈りつつ、筆を擱く。

## 註

- (1) C.C.Chin, Karl Hack, eds., *Dialogues with Chin Peng: New Light on the Malayan Communist Party*, Singapore University Press, 2004.
- 陳劍主編『与陳平對話——馬來亞共產黨新解』Kuala Lumpur, 馬來西亞華社研究中心, 二〇〇六年
- (2) Greg Poulgrain, *The Genesis of Konfrontasi: Malaysia, Brunei, Indonesia, 1945-1965*, Bathurst, Australia, Crawford House Publishing, 1998.
- (3) この会議で得た新しい情報、資料を取り入れた下記の本(南  
 (4) 結果は、下記にまとめられている。関心のある方は見ていただきたい。  
 「日本・東南アジア関係の史実と評価——原不二夫著『英領マ  
 ラヤの日本人』をめぐって——」『アジア経済』第三三卷第三  
 号、一九九二年三月、九三—一二頁。

## 追記

歴史研究において、多くの意味で聴き取り以上に重要なのは、公文書館における史・資料、とりわけ一次史・資料の閲覧だが、マレーシアの国立公文書館 (Arkib Negara Malaysia) について、忘れられない経験がある。

今から二〇年余り前、ここに通って勉強していたある日、ガラス戸の出入り口の脇の大きなガラス板が破れて床にかなりの血が付いていた。係の人に聞いてみると、閲覧室から出ようとした若い研究者が出入り口と間違えて体ごと勢い良くぶつかったため、このようなことになった、考え事をしていてガラスに気が付かなかったようだ、との返事だった。幸いたった怪我ではないようだった。私は、よほど重大な一次資料に巡り合っただけで現実の世界が見

えなくなるほど興奮したのだろう、と推測した。

この研究者がその後どうなったか知らない。しかし、これほど資料の世界に没頭できた人は、その後すばらしい成果を世に送り出したに違いない、と思う。残念ながら没頭の度合いの足りなかつた当老輩は、さしたる成果もな  
いまま消えて行く。